

日・英語間における オノマトペの落差について（上）

安井 稔
Yasui Minoru

1. 擬音語には国境がある

「春の小川はどのように流れますか」と問われれば、たいていの日本人は次の(1a)のように答えるであろう。これを英語で表そうとするとせいぜい(1b)のような形であろう。

- (1) a. 春の小川はさらさら流れる。
b. **In spring, streams run smoothly.**

この場合、注意すべきは(1b)の文からなんらかの音を引き出すことは全く不可能であるという点である。**smoothly** というのは「静かに」ということで「静かに」というのは「音をたてないこと」を意味するからである。

では(1a)のほうはどうであろうか。春の小川を前にして耳をすませるとなにか音が聞こえてくるであろうか。聞こえてくる場合もあれば、聞こえてこない場合もある。聞こえてこない場合は、概略、(1b)の世界である。では聞こえてくる場合はどうか。「さらさら」という語によって示される音が実際に聞

こえてくるであろうか。「さらさら」に対応する音が全くないとはいわぬが、それはむしろまれであるといつてよいであろう。「巻き紙に筆でさらさらと手紙を書く」というような場合になると、問題となっているのは音ではなく様子であろう。

「さらさら」を手元の辞書で引くと「小さな流れが小石などに当たりながらよどみなく流れる様」のようにになっている。つまり、「さらさら」というのは「音」ではなく「様態」を示しているということになる。つまり「さらさら」は擬音語ではなく擬態語的であることになる。

一般に、擬音語と擬態語との区別は、原感覚が聴覚であるか、聴覚以外のもの、例えば視覚、触覚などであるかに基づいて行われる。しかしながら、その区別はあまり明確なものではない。それはすぐ上でみた「さらさら」の例からだけでも明らかであろう。

擬態語は音を伴わないものごとの状態や様子を、象徴的に音を用いて表そうとしたものとされる。が、象徴的に音を表す語で示すという点は、程度の差こそあれ、擬音語についても同じく当てはまると考えられる。すなわち、擬音語とか擬声語とかの名前で呼ばれている語は、一般の予測とは異なり、自然界の音をそのまま写し取っているものではないということの意味する。自然界の音をそのまま写し取るということであれば、それはいわゆる声帯模写の世界へ入ってゆくことになる。それは鳥獣などの鳴き声をできるだけ忠実に再生することを意図している演芸の世界である。

声帯模写の世界と擬音語の世界とは、明確な壁によって仕切られている。声帯模写の世界にはことばはない。ことば以前の世界である。したがって国境はなく、万国共通のはずである。

声帯模写の世界から擬音語の世界に入るとそこはもう言語の世界である。言語の世界は、言語ごとに異なる。万国共通ということはありえない。日本語と英語とでは、言語の最も基本的な要素であるとしてよい音素の体系が全く異なる。音素の結合様式を規制している規則も両言語では全く異なる。

犬は「ワンワン」と鳴く。我々は日常的にそう思っている。けれどもそれは日本語という言語の世界の中の話であるにすぎない。異なる種類の言語を仮に20個集めてきたとする。すると犬の鳴き声は20とおりにあることになる。(その実際は『ウィキペディア』の「オノマトペ」などの項で確かめることができる。) いずれの場合も自然界の音がそれぞれの言語ごとに異なる音素とその結合様式という網目をくぐり抜けることによって成立するに至っているものである。言語ごとに鳴き声が変わっているのは理の当然である。

他方、異なる言語間においても、同じ意図をもつ擬音語同士の間には一定の類似性が認められることはもちろんありうる。日本語の「ワンワン」と英語の **bow-wow** との間には [b], [w] という両唇音や非前舌母音の対応がみられるし、「コケッコー」と **cock-a-doodle-doo** との間にも [k] 音や後舌母音の対応がみられる。音象徴の名で呼んでよい現象は各言語を通じてみられる普遍的な現象であるといつてよいであろう。

自然界の現実とそれを音として表す言語表記との距離は決して一様ではない。上で触れた「さらさら」は対応する自然音の場合によっては欠落している。この傾向は「しんしんと」のような語となるといっそうはなはだしい。手元の辞書でみると「しんしん」は「ひっそりと静まりかえっている様」とある。つまり、定義上、自然界に対応する音は存在しない。にもか

ならず、それを擬態語として、つまり、様子を表す音として、用いようとしているのである。したがって「夜がしんしんとふける」、「雪がしんしんと降る」、「夜になるとしんしんと冷えてきた」など、みな、そうである。

ちなみに、手元の和英辞典で「しんしんと」を引くと、「夜のふけてゆく様」、「雪が降る様」、「寒さがみにしみる様」などの説明があり、対応する英語の表現が与えられている。

自然界に音源がないのに、その様子を、いわば、音声化して、示すという言語的技巧は、英語にはないと思われる。このことは、英語にはいわゆる擬態語は存在しない、ということの意味する。「擬態語」という用語自体も存在しない。それによって示される語が存在しない以上、考えてみれば当然のことである。これらのことは日本語の擬態語の例をみれば明らかであろう。以下(2)にそのいくつかの例を示す。

(2) にやにや、ほくほく、ぼつぼつ、ぼちぼち、そろそろ、もりもり、ちびちび、ほとほと、しずしず(と歩を進める)、ばたばた、もくもく(煙について)、ひたひた、どんぶらこ、すばすば(たばこについて)、ぐいぐい、らんらん(と目が光る)、ぎすぎす(した人間関係)、ずかずか、しとしと、きよときよと、ぽんぽん(ものをいう)、すらすら、しげしげと、くるくる(回る風車)、(太陽が)さんさんと、するすると(木にのぼる)、せかせかと、そわそわ(する)、だらだら、ずるずる、つるつる、てくてく、(話が)とんとん(と進む)、ちょうちょうなんなん、つんつん、てらてら、てきぱき、でれでれ、どきどき、なあなあ、にこにこ、ぴょんぴょん、ぷりぷり、へらへら、ぼりぼり、ぴんぴん(している)、

べらべら、ぺらぺら、ほかほか、ぽかぽか、ぼこぼこ、まんまと、むかむか、めそめそ、もぞもぞ、もこもこ、もやもやした、ゆらゆら、ルンルン(気分)、ねちねち、ぴりぴり、ぼりぼり、かりかりの(人)、きりきり(舞い)、(目が)くらくら(する)、けらけら(笑う)、こちこち、さめざめと(泣く)、しみじみ、しゃきしゃき、しゃぶしゃぶ、ぬるぬる、ねばねば、ねとねと、ねちゃねちゃ、ぬめぬめ

これらはただ思いつくままに並べたものである。一見して驚くのは、これらの語がほとんど例外なく日常の生活用語として用いられ、その使用頻度も極めて高いという点である。しかも、英語にはこれらの、いわゆる擬態語に対応する表現が見事に欠落している。英語国民は(2)に列挙したような表現をいっさい用いることなく、生活していることになる。(2)を手掛かりとして入手することのできる世界を拒否した状態で生活していることになる(日本語の「もやもや」をそのまま取り入れた **Moyamoya disease** (もやもや病)のような病名が医学用語として定着しているのは例外的な現象である)。我々日本人の場合、なんらかの理由によって(2)の使用が禁止となったとしたら、どうなるであろうか。生活ができなくなるということはないであろう。けれども、我々の生活はのびやかさを失い、ちぢこまったものになるのではないかという気がする。落語の世界など成立しなくなるおそれがある。童謡の世界などはほとんど全滅といってよいであろう。

童謡に関しては、極めてよい参考となる本があるので二、三の例について少し検討してみることにしよう。参考にしたのは『グレッグ・アーウィンの英語で歌う、日本の童謡――

『Japanese Children's Songs』(2007年、ランダムハウス講談社)という本で、著者はアメリカ人である。

まず、次の(3)からみてゆくことにしよう。(3a)は「あめあめ ふれふれ かあさんが……」で始まる童謡であり、(3b)はその英訳である。

(3) a. あめふり

あめあめ ふれふれ かあさんが
じゃのめで おむかい うれしいな
ピッチピッチ チャップチャップ
ランランラン

b. Happy am I

Rain is falling, Mom is calling, Look at that sky
She will bring her umbrella to keep me dry
Splishy, splishy, splashy, splashy,
Happy am I!

問題はもちろん英訳の部分にある。日本語の「ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン」に当たる英語を探し求め、やっと得られるのが **Splishy, splishy, splashy, splashy. Happy am I!** どまりであるということである。

同じ場面的状況において当の子供が経験した心の躍動感を英語で表現せよ、といわれたら、(3a)の英語は模範解答の一つとして十分に通用するであろう。が、この英語によって当の子供が感じている心の躍動感、すなわち、降りしきる雨の中を、傘をさし、長靴をはき、水しぶきを飛ばしながら、迎えに来た母親めがけて跳びはねてゆきたい気持ちを伝えることは不可能で

あろう。

もう一つ、童謡「雪」をみることにしよう。次の(4)である。

(4) a. 雪やこんこ、霰やこんこ
降っても 降っても
まだ降り やまぬ

b. **Snow is falling, plop, plop**
Ice is falling, drop, drop
Please call a wizard
This blizzard will never stop

この場合、「こんこ」という表現はやや特異なものである。つまり降りしきる雪以外のものについて用いられることはほとんどないと思われる。いわば、雪降り専用の擬態語である。が、逆に雪降り専用の擬態語としてみると実によくできている。言えて妙である。

雪の降りしきる様を表すには、やや文語調ながら「霏霏(ひひ)として」が用いられる。この語自体、擬態語である。雪が降るとき「ヒヒ」という音をたてるわけではない。これを子供のはずんだ心でとらえ直すと「こんこ」となるというわけである。音のない世界を音で表すという方便(すなわち擬態語)をもたない英語ではまったくお手上げであり、手のうちようがない。(4b)に見られるような **plop, plop, drop, drop** などはその涙ぐましい努力にもかかわらず、隔靴搔痒(かっかそうよう)の域に達することさえできていないといつてよいであろう。

ここで大きな問題となってくるのは、日本語ではできること

が英語ではどうしてできないのかということである。英語では手も足もでないことが日本語ではいとも易々と日常茶飯事のこととして行われているのはなぜか、ということである。考える答えの一つを結論的な形で述べるとすると、我々日本人は音のない世界における、いわば、音をとらえることのできる「心の耳」をもっているからであるとするところができるであろう。

それはなぜか、と問われるなら、日本人と英語国民とは異なる構造の心をもっているからだ、と答えるしかない。日本古来の固有の文化と英語国民の固有の文化とは異なる構造をもった心によって、互いに異なる形を育てていったものと考えられる。目下のところそれ以上の断定や推測を行っても有益な結果は望めないであろう。わずかに期待をかけるものがあるとするなら、それは大脳生理学の新展開であろうが、この場合でも、望みうるのはせいぜいのところ、日本人と英語国民との間には右脳と左脳の働きに差がみられる、といった程度にとどまるのではないかと思われる。

「心の耳」という考え方は、擬音語と擬態語との関係についても、さらには、日本語の擬音語と英語の擬音語の対比に関しても、新しい知見を導入してくれるように思われる。

2. 擬音語と擬態語との関係について

擬音語と擬態語の境界線が常にはっきりしているとは限らないということに関しては、上でもちょっと触れるところがあった。が、「心の耳」という観点に立つと、擬音語と擬態語という区別は、そもそも不要となる。両者はともに「音」としての表現であり、両者はともに究極的には心の耳で聞き分けている音であるといえるからである。このことは擬音語がもしも我々

の聴覚に直接基づいている音を表しているのなら、擬音語表現は、声帯模写的表現とあまり異なるところのない表記になってもおかしくないはずであるということをおぼせる。犬の鳴き声は万国共通であるといつてよいのに、その擬音語は言語ごとに異なるという事実も、「心の耳というプリズム」を介在させない限り、説明不能となるであろう。逆にニワトリの鳴き声を「コケッコー」とか **cock-a-doodle-doo** などで表そうとする声帯模写の演技者がいたら即日解雇のうきめに会うであろう。

ここですぐ問題となるのは、上で触れた「心の耳というプリズム」は万国共通のものであるか、ということであろう。この問いに対する答えは考えるまでもなく「否」である。英語には擬態語がない旨を述べてきているが、これは英語の中にこのプリズム装置が埋め込まれていない、何よりの証拠となるからである。

3. 日本語のオノマトペと英語のオノマトペ

一般に広義の擬音語は擬態語をその中に含むとされている。これは『広辞苑』などによっても明らかである。が、包含関係ということでは、広い意味における擬態語には擬音語も含まれるというべきであろう。自然界における音の世界と沈黙の世界とを比べるなら、沈黙の世界のほうが無標であると考えられるからである。

「ポリポリ」というのはたくあんをかむときの音である。確かに音はするがそれは耳に聞こえている音であろうか。確かに耳に聞こえている場合もある。が、常にそうであるとは限らない。例えば唇をぴったり閉じてもう一度たくあんをかんでみる。「ポリポリ」はどうなったか。やはりポリポリはあるでは

ないか。

ところがこの場合の「ポリポリ」は聴覚に基づくものではない。聴覚によってとらえられるのは音である。音というのは空気の振動である（「骨伝導」ということもあるが、以下では、骨伝導による聴覚という現象は、しばらくこれをおくこととする）。この場合、口を閉じていれば空気の振動は生じない。したがって、聞き手の耳でとらえられる音は存在しない。したがって、たくあんの「ポリポリ」は擬音語ではなく擬態語であるとされなければならない。が、「ポリポリ」は、本来、擬音語であったのではなかったか。

こういうへんてこりんな状態、あるいはあと味の悪さは、「心の耳」というプリズムを介在させることによって解消される。本来、擬音語とか擬態語とかいう用語によって提起されるべき問題は、自然界の現象が聴覚によってどれだけ知覚され、区別されるかということではない。真に問題とされるべきなのは、我々を取り巻く自然環境のうち、どこまでを言語化するのか、という点にあると考えるべきであろう。オノマトペとの関連でいえば、「ちょっと耳をすませてごらん。ほら、ある音、ない音、いろんな音が聞こえてくるではありませんか」。

そういう「心の耳」をくすぐる様々な音を見事に言語化する方策を日本語は備えている。片仮名の結合は意味と結びつくことなく、音声を表すことができる。ここが漢字と根本的に異なる点である。片仮名のおかげで我々日本人は心の耳をすますと聞こえてくる様々な音を、いわば、不即不離の形で言語化することができる。一旦言語化されると声帯模写とは画然と区別される別次元の世界、つまり、言語の世界の単位として認知され、他の既存の言語単位と自由に結合する資格を与えられるこ

とになる。

声帯模写の世界と、言語化された、いわゆる擬音語の世界とが、全く異なる次元の世界であることに疑念の余地はない。では擬音語の世界に限って考えてゆくとするとどうなるであろうか。言語間でかなり大きな違いのみられることはいうをまたない。が、そもそも、違いが問題となるのは同じ自然音を写しているものであるから、互いにもっと似かよっていてもいいはずだ、という意識があるからであると思われる。この疑念は極めて正当なものである。とはいえ、これに対する一刀両断的答えは不可能に近い。けれども皆目見当がつかないということでもない。例えば、ここで日本語のオノマトペと英語のオノマトペとを比較し、どこに最も大きな違いがあるかという点に論点をしばって考えてみることにしてみよう。

我々はすでに自然界の音とオノマトペとの間における決定的な違いは言語化の有無にあるとした。それは声帯模写とオノマトペとの違いでもある。

けれどもここにいう言語化という過程はすべての言語において一様であるわけではない。日本語と英語との間における違いは特に顕著であるといつてよい。この点は従来、論者たちによって論ぜられることがほとんどなかったように思われる。それだけ、いっそう注意を要するように思われる。

英語のオノマトペを日本語のオノマトペから区別している最も大きな特性は語彙化 (**lexicalization**) という術語によって特徴づけられるものであろう。語彙化というのはある音声の連続体が英語の語彙 (**lexeme**) 体系の一員として認知され、受け入れられることを意味する。つまり、自然界に存在する音を英語における音声の結合体として表し、それを英語におけるオノマ

トペとして認知するという事は、そのオノマトペを、従来から存在していた英語の語彙体系の中に組み込み、一人前の語彙項目として取り扱うことを意味する。

具体的な例について少しみてゆくことにしよう。英語におけるオノマトペの代表的な例として「あひる」の鳴き声を取りあげてみる。「あひる」の鳴き声は日本語では「ガーガー」、英語では **quack** であるとされる。

それに違いはない。が、通例この話題はこれでおしまいとなり、「ぶた (pig)」は日本語では「ブーブー」、英語では **oink** と鳴く、のように通例展開してゆくが、真に問題とすべきはその先である。すなわちあひるの鳴き声としての **quack** が英語の語彙目録の一員として認められているということは何を意味するか、を問うべきなのである。

まず問われるべきなのは、**quack** の品詞である。名詞である場合と、動詞である場合とがあるとすぐ分かる。この点が実は重要なのである。英語には品詞をもたない語彙項目というのは本来存在しえないからである。品詞が与えられてはじめて語彙項目の仲間入りが可能となるのである。

名詞という判定が与えられたとすると、可算名詞・不可算名詞のいずれであるかが問われる。可算名詞でも不可算名詞でもないという名詞は存在しえないからである。**quack** の場合、通例可算名詞扱いである。始めと終わりがあり、前後が区切られている塊りと考えることができるからである。名詞としての **quack** は **a quack** か **quacks** の形で用いられ、通例、はだかの **quack** という形では用いられない。当然のことながら日本語の「ガーガー」にはこのような制約はない。

他方、動詞という品詞を与えられた **quack** は主語が三人称

単数で現在形なら **quacks** という形をとり、それ以外の現在形なら **quack**、過去形なら **quacked** となる。その他、現在進行形 (**is quacking**)、過去進行形 (**was quacking**)、完了形 (**have quacked**)、完了進行形 (**have been quacking**) 等々、他の一般動詞と全く同じようにすべての変化形を許容する語彙化とはこういうことを指すのである。こういった制約とか特権といったものは日本語の「ガーガー」にはない。

英語には明確な形で認められるとした語彙化 (**lexicalization**) という現象は、日本語の場合、あまり明確な形では存在していないのではないかと思われる。日本語の書記体系には英語におけるような分かち書きという決まりがなく、このことも明確な語彙化という過程の存在を妨げているというところがあるかもしれない。

もっというなら、名詞止めの形で成立している俳句が極めて多いという事実も、語彙化不在という日本語の特性と無関係ではないかもしれない。名詞止めであっても、実質的には動詞、形容詞、副詞、感嘆詞などを内包していると考えられる場合が少なくないからである。英語の場合、上でも触れたが、名詞は単数形か複数形かという選択を必ず迫られる。日本語にはそれが無い。だから、かわずが池に飛び込んでも、からすが枯れ枝にとまっても、せみの声が岩にしみ入っても、単数形か複数形かということを問題にする人はいない。「ピンク・レディー」とか「スリーボール、ツーストライク」などの形も問題にする人はまずいない。が、英語となれば **pink ladies, three balls and two strikes** のように複数形にしなければならない。得体のしれない、あるいは無意味音節 (**nonsense syllable**) といって差し支えない片仮名語の氾濫も語彙化制約の不在と無関係で

はないかもしれない。

ここで英語におけるオノマトペの具体例が列挙されていると
いってよい一種のわらべ歌を挙げておくことにする。題名は
Old MacDonald（「ゆかいな牧場」）で次の（5）はその全歌詞で
ある。

（5） a. “Old MacDonald” の歌詞

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had some chicks, E-I-E-I-O.
With a chick chick here and a chick chick there,
Here a chick, there a chick, ev'rywhere a chick
chick.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a cow, E-I-E-I-O.
With a moo moo here and a moo moo there,
Here a moo, there a moo, ev'rywhere a moo moo.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a pig, E-I-E-I-O.
With an oink oink here and an oink oink there,
Here an oink, there an oink, ev'rywhere an oink
oink.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had some geese, E-I-E-I-O.
With a honk honk here and a honk honk here,**

**Here a honk, there a honk, ev'rywhere a honk
honk.**

Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a horse, E-I-E-I-O.
With a neh neh here and a neh neh there,
Here a neh, there a neh, ev'rywhere a neh neh.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a mule, E-I-E-I-O.
With a hee haw here and a hee haw there,
Here a hee, there a hee, ev'rywhere a hee haw.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

**Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O,
And on his farm he had a duck, E-I-E-I-O.
With a quack quack here and a quack quack
there,
Here a quack, there a quack, ev'rywhere a quack
quack.
Old MacDonald had a farm, E-I-E-I-O.**

- b. 「ゆかいな牧場」（小林幹治作詞・アメリカ民謡）
いちろうさんの 牧場（まきば）で
イーアイ イーアイ オー
おや ないてるのは ひよこ
イーアイ イーアイ オー あら
チッチッチッ ほら チッチッチッ

あっちもこっちも どこでもチッチッ
チッチッチッ ほら チッチッチッ
あっちもこっちも どこでもチッチッ
いちろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

じろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー
おや ないてるのは あひる
イーアイ イーアイ オー あら
クワックワックワッ ほら クワックワックワッ
あっちもこっちも どこでもクワックワッ
クワックワックワッ ほら クワックワックワッ
あっちもこっちも どこでもクワックワッ
じろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

さぶろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー
おや ないてるのは しちめん鳥
イーアイ イーアイ オー あら
グルグルグル ほら グルグルグル
あっちもこっちも どこでもグルグル
グルグルグル ほら グルグルグル
あっちもこっちも どこでもグルグル
さぶろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

しろさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

おや ないてるのは こぶた
イーアイ イーアイ オー あら
オインオインオイン ほら オインオインオイン
あっちもこっちも どこでもオインオイン
オインオインオイン ほら オインオインオイン
あっちもこっちも どこでもオインオイン
しろさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

ごろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー
おや ないてるのは こうし
イーアイ イーアイ オー あら
モーモーモー ほら モーモーモー
あっちもこっちも どこでもモーモー
モーモーモー ほら モーモーモー
あっちもこっちも どこでもモーモー
ごろうさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

ろくろさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー
おや ないてるのは ろば
イーアイ イーアイ オー あら
ヒーヒーヒー ほら ヒーヒーヒー
あっちもこっちも どこでもヒーヒー
ヒーヒーヒー ほら ヒーヒーヒー
あっちもこっちも どこでもヒーヒー
ろくろさんの 牧場で
イーアイ イーアイ オー

注意すべきは、(5a) とその大意を示している (5b) との対比によっても明らかなように、英語のオノマトペ名詞には克明に不定冠詞がつけられているという点である。律儀というしかない。

—つづく—

(東北大学名誉教授)